

三つの宝

芥川龍之介

青空文庫

森の中。三人の盗ぬすびと人が宝を争っている。宝とは一飛びに千里飛ぶ長靴ながぐつ、着れば姿の隠れるマントル、鉄でもまっふた二つに切れる剣けん——ただしいずれも見たところは、古道具らしい物ばかりである。

第一の盗人 そのマントルをこつちへよこせ。

第二の盗人 余計よけいな事を云うな。その剣こそこつちへよこせ。――

――おや、おれの長靴を盗んだな。

第三の盗人 この長靴はおれの物じゃないか？ 貴様こそおれの

物を盗んだのだ。

第一の盗人 よしよし、ではこのマントルはおれが貰つて置こう。

第二の盗人 こん畜ちくしやう生！ 貴様なぞに渡してたまるものか。

第一の盗人 よくもおれを撲なぐつたな。——おや、またおれの剣も

盗んだな？

第三の盗人 何だ、このマントル泥坊め！

三人の者が大喧嘩おおげんかになる。そこへ馬またがに跨つた王子が一人、森

の中の路を通りかかる。

王子 おいおい、お前たちは何をしているのだ？ （馬から下り

る）

第一の盗人 何、こいつが悪いのです。わたしの剣を盗んだ上、

マントルさえよこせと云うものですから、——

第三の盗人 いえ、そいつが悪いのです。マントルはわたしのを盗んだのです。

第二の盗人 いえ、こいつ等は二人とも大泥坊です。これは皆わたしのものなのですから、——

第一の盗人 嘘をつけ！

第二の盗人 この大法螺吹おおぼらふきめ！

三人また喧嘩をしようとする。

王子 待て待て。たかが古いマントルや、穴のあいた長靴ぐらい、誰がとつても好いいじゃないか？

第二の盗人 いえ、そうは行きません。このマントルは着たと思

うと、姿の隠れるマントルなのです。

第一の盗人　どんなまた鉄の兜かぶとでも、この剣で切れば切れるのです。

第三の盗人　この長靴もはきさえすれば、一飛びに千里飛べるのです。

王子　なるほど、そう云う宝なら、喧嘩をするのももつともな話だ。が、それならば欲張よくばらずに、一つずつ分ければ好いいじゃないか？

第二の盗人　そんな事をしてごらんなさい。わたしの首はいつ何な時んどき、あの剣に切られるかわかりはしません。

第一の盗人　いえ、それよりも困るのは、あのマントルを着られ

れば、何を盗まれるか知れますまい。

第二の盗人　いえ、何を盗んだ所が、あの長靴をはかなければ、

思うようには逃げられない訣わけです。

王子　それもなるほど一ひとりくつ理窟りくつだな。では物は相談だが、わたし

にみんな売ってくれないか？　そうすれば心配も入らないはずだから。

第一の盗人　どうだい、この殿様に売ってしまうのは？

第三の盗人　なるほど、それも好いいかも知れない。

第二の盗人　ただ値段次第だな。

王子　値段は——そうだ。そのマントルの代りには、この赤いマントルをやろう、これには刺ぬいとり繡いしの縁ふちもついている。それから

その長靴の代りには、この宝石のはいった靴をやろう。この黄金細工の剣をやれば、その剣をくれても損はあるまい。どうだ、この値段では？

第二の盗人 わたしはこのマントルの代りに、そのマントルを頂きましよう。

第一の盗人と第三の盗人 わたしたちも申し分はありません。

王子 そうか。では取り換えて貰おう。

王子はマントル、剣、長靴等を取り換えた後、また馬の上に跨りながら、森の中の路を歩きかける。

王子 この先に宿屋はないか？

第一の盗人 森の外へ出さえすれば「黄金の角笛」という宿屋

があります。では御大事にいらつしやい。

王子　　そうか。ではさようなら。(去る)

第三の盗人　　うまい商売をしたな。おれはあの長靴が、こんな靴になろうとは思わなかつた。見ろ。止め金とがねには金剛石ダイヤモンドがついている。

第二の盗人　　おれのマントルも立派りっぱな物じゃないか？　これをこ
う着た所は、殿様のように見えるだろう。

第一の盗人　　この剣も大した物だぜ。何しろ柄つかも鞘さやも黄金きんだからな。——しかしああやすやす欺だまされるとは、あの王子も大莫迦おおばかじゃないか？

第二の盗人　　しっ！　壁に耳あり、徳利とくりにも口だ。まあ、どこか

へ行つて一杯やろう。

三人の盗人は嘲笑あざわらいながら、王子とは反対の路へ行つてしま
う。

二

「黄金きんの角つ笛ぶえ」と云う宿屋の酒場。酒場の隅すみには王子がパン
を嚙かじっている。王子のほかにも客が七八人、——これは皆村
の農夫らしい。

宿屋の主人 いよいよ王女の御婚ごこんれい礼れいがあるそうだね。

第一の農夫 そう云う話だ。なんでも御壻おむこになる人は、黒ん坊の

王様だと云うじやないか？

第二の農夫　しかし王女はあの王様がだいきら大嫌いだと云ううわさ噂だぜ。

第一の農夫　嫌いなればお止しなされば好いいのに。

主人　ところがその黒ん坊の王様は、三つの宝ものを持っている。

第一が千里飛べる長靴ながぐつ、第二が鉄てつさえ切れる剣けん、第三が姿の

隠れるマントル、——それを皆けんじょう献上けんじょうすると云うものだから、

欲の深いこの国の王様は、王女をやるとおっしゃったのだそう
だ。

第二の農夫　御お可か哀わいそうなのは王女御一人だな。

第一の農夫　誰か王女をお助け申すものはないだろうか？

主人　いや、いろいろの国の王子の中には、そう云う人もあるそ

うだが、何分あの黒ん坊の王様にはかなわなから、みんな指を^{くわ}啣えているのだとさ。

第二の農夫 おまけに欲の深い王様は、王女を人に盗まれないように、^{りゆう}竜の番人を置いてあるそうだ。

主人 何、竜じゃない、兵隊だそうだ。

第一の農夫 わたしが^{まほう}魔法でも知っていれば、まっ先に御助け申すのだが、――

主人 当り前さ、わたしも魔法を知っていれば、お前さんなどに^{まか}任せて置きはしない。(一同笑い出す)

王子 (突然一同の中へ飛び出しながら) よし心配するな！ きつとわたしが助けて見せる。

一同（驚いたように）あなたが

王子　そうだ、黒ん坊の王などは何人でも来い。（腕組をしたまま、一同を見まわす）わたしは片っ端ぱしから退治たいじして見せる。

主人　ですがあの王様には、三つの宝があるそうです。第一には千里飛ぶ長靴、第二には、――

王子　鉄でも切れる剣か？　そんな物はわたしも持っている。この長靴を見る。この剣を見る。この古いマントルを見る。黒ん坊の王が持っているのと、寸すんぶん分も違わない宝ばかりだ。

一同（再び驚いたように）その靴が　その剣が　そのマントルが

主人（疑わしそうに）しかしその長靴には、穴があいているじ

やありませんか？

王子 それは穴があいている。が、穴はあいていても、一飛びに千里飛ばれるのだ。

主人 ほんとうですか？

王子 (憐むあわれように) お前には嘘うそだと思われるかも知れない。よ

し、それならば飛んで見せる。入口の戸をあけて置いてくれ。
好いいか。飛び上つたと思うと見えなくなるぞ。

主人 その前に御勘定おかんじようを頂きましうか？

王子 何、すぐに帰って来る。土産みやげには何を持って来てやろう。

イタリアの柘榴ざくろか、イスパニアの真桑瓜まくわうりか、それともずっと遠いアラビアの無花果いちじくか？

主人 御土産おみやげならば何でも結構です。まあ飛んで見せて下さい。

王子 では飛ぶぞ。一、二、三！

王子は勢いきおいよよく飛び上る。が、戸口へも届とどかない内に、どたりと尻餅しりもちをついてしまう。

一同どつと笑い立てる。

主人 こんな事だろうと思つたよ。

第一の農夫 千里どころか、二三間も飛ばなかつたぜ。

第二の農夫 何、千里飛んだのさ。一度千里飛んで置いて、また

千里飛び返つたから、もとの所へ来てしまつたのだろう。

第一の農夫 冗談じょうだんじゃない。そんな莫迦ばかな事があるものか。

一同大笑いになる。王子はすごすご起き上りながら、酒場の外

へ行こうとする。

主人 もしもし御勘定を置いて行つて下さい。

王子無言のまま、金を投げる。

第二の農夫 御土産は？

王子 (劍の柄へ手をかける) 何だど？

第二の農夫 (尻ごみしながら) いえ、何とも云いはしません。

(独り語のように) 劍だけは首くらい斬れるかも知れない。

主人 (なだめるように) まあ、あなたなどは御年若なので

から、ひとまず先御父様の御国へお帰りなさい。いくらあなたが

騒いで見たところが、とても黒ん坊の王様にはかないはしませ

ん。とかく人間と云う者は、何でも身のほどを忘れないように

つし
 慎み深くするのが 上分別じょうぶんべつです。

一同 そうなさい。そうなさい。悪い事は云いはしません。

王子 わたしは何でも、——何でも出来ると思つたのに、（突然涙を落す）お前たちにも恥はずかしい（顔を隠しながら）ああ、このまま消えてもしまいたいようだ。

第一の農夫 そのマントルを着て御覧なさい。そうすれば消えるかも知れません。

王子 畜生ちくしよう！（じだんだを踏む）よし、いくらでも莫迦ぼかにしろ。わたしはきつと黒ん坊の王から可哀そうな王女を助けて見せる。長靴は千里飛ばれなかつたが、まだ剣もある。マントルも、——（一生懸命に）いや、空手からてでも助けて見せる。その時

に後悔こうかいしないようにしろ。(氣違こいのように酒場を飛び出してしまこう。)

主人 困こったものだ、黒ん坊の王様に殺されなければ好こいが、――

三

王城の庭。薔薇ばらの花の中に噴水ふんすいが上あっている。始はは誰もいないい。しばらくののち後、マントルを着た王子が出て来る。

王子 やはりこのマントルは着たと思うと、たちまち姿が隠れると見える。わたしは城の門をはいってから、兵卒にも遇あえば腰こ

元にも遇つた。が、誰も咎めたものはない。このマントルさえ着ていれば、この薔薇を吹いている風のように、王女の部屋へもは入れるだろう。——おや、あそこへ歩いて来たのは、噂に聞いた王女じゃないか？　どこかへ一時身を隠してから、——何、そんな必要はない、わたしはここに立っていても、王女の眼には見えないはずだ。

王女は噴水の縁へ来ると、悲しそうにため息をする。

王女　わたしは何と云う不仕合せなのだろう。もう一週間もたたない内に、あの憎らしい黒ん坊の王は、わたしをアフリカへつれて行つてしまう。

獅子や鱐のいるアフリカへ、（その芝の上に坐りながら）わ

たしはいつまでもこの城にいたい。この薔薇の花の中に、噴水の音を聞いていたい。……

王子 何と云う美しい王女だろう。わたしはたとい命を捨てても、この王女を助けて見せる。

王女 (驚いたように王子を見ながら) 誰です、あなたは？

王子 (独り語ごごとのように) しまった！ 声を出したのは悪かったのだ！

王女 声を出したのが悪い？ 気違きちがいかしら？ あんな可愛い顔をしているけれども、——

王子 顔？ あなたにはわたしの顔が見えるのですか？

王女 見えますわ。まあ、何を不思議ふしぎそうに考えていらっしやる

の？

王子 このマントルも見えますか？

王女 ええ、ずいぶん古いマントルじゃありませんか？

王子 (落胆らくたんしたように) わたしの姿は見えないはずなので
がね。

王女 (驚いたように) どうして？

王子 これは一度着さえすれば、姿が隠れるマントルなのです。

王女 それはあの黒ん坊の王のマントルでしょう。

王子 いえ、これもそうなのです。

王女 だって姿が隠れないじゃありませんか？

王子 へいそつ兵卒や腰こしもと一元あに遇った時は、確かに姿が隠れたのですが

ね。その証^{しょうこ}拠には誰に遇つても、咎^{とが}められた事がなかつたのですから。

王女 (笑い出す) それはそのはずですよ。そんな古いマントルを着ていらつしやれば下男^{げなん}か何かと思われますもの。

王子 下男! (落胆したように坐つてしまふ) やはりこの長靴と同じ事だ。

王女 その長靴もどうかしましたの?

王子 これも千里飛ぶ長靴なのです。

王女 黒ん坊の王の長靴のように?

王子 ええ、——ところがこの間^{あいだ}飛んで見たら、たった二三間も

飛べないのです。御覧なさい。まだ剣^{けん}もあります。これは鉄で

も切れるはずなのですが、——

王女 何か切つて御覧になつて？

王子 いえ、黒ん坊の王の首を斬きるまでは、何も斬らないつもり
なのです。

王女 あら、あなたは黒ん坊の王と、腕うで競くらべをなさりにいらし
つたの？

王子 いえ、腕競べなどに来たのじやありません。あなたを助け
に来たのです。

王女 ほんとうに？

王子 ほんとうです。

王女 まあ、嬉しい！

突然黒ん坊の王が現れる。王子と王女とはびっくりする。

黒ん坊の王 今日こんにちは。わたしは今アフリカから、一飛びに飛ん

で来たのです。どうです、わたしの長靴の力は？

王女 (冷淡に) ではもう一度アフリカへ行つていらつしやい。

王 いや、今日きょうはあなたと一しよに、ゆっくり御話ごわがしたいのです。
(王子を見る) 誰ですか、その下男は？

王子 下男？ (腹立たしそうに立ち上る) わたしは王子です。王女を助けに来た王子です。わたしがここにいる限りは、指一本も王女にはささせません。

王 (わざと叮ていねいに) わたしは三つの宝を持っています。あなたはその知っていますか？

王子 劍と長靴とマントルですか？ なるほどわたしの長靴は一町も飛ぶ事は出来ません。しかし王女と一しよならば、この長靴をはいていても、千里や二千里は驚きません。またこのマントルを御覧なさい。わたしが下男と思われたため、王女の前へも来られたのは、やはりマントルのおかげです。これでも王子の姿だけは、隠す事が出来たじやありませんか？

王 (嘲笑あざわらう) 生意気なまいきな！ わたしのマントルの力を見るが好い。(マントルを着る。同時に消え失せる)

王女 (手を打ちながら) ああ、もう消えてしまいました。わたしはあの人が消えてしまうと、ほんとうに嬉しくてたまりませんわ。

王子 ああ云うマントルも便利ですね。ちようどわたしたちのた
めに出来ているようです。

王 (突然また現われる。忌々いまいましそうに) そうです。あなた方
のために出来ているようなものです。わたしには役にも何にも
たたない。(マントルを投げ捨てる) しかしわたしは劍を持っ
ている。(急に王子を睨にらみながら) あなたはわたしの幸福を奪
うものだ。さあ尋常に勝負をしよう。わたしの劍は鉄でも切れ
る。あなたの首位は何でもない。(劍を抜く)

王女 (立ち上るが早いか、王子をかばう) 鉄でも切れる劍なら
ば、わたしの胸も突けるでしょう。さあ、一突きに突いて御覽
なさい。

王 (尻ごみをしながら) いや、あなたは斬れませきん。

王女 (嘲あざけるように) まあ、この胸も突けないのですか？ 鉄で

も斬れるとおっしゃった癖に！

王子 お待ちなさい。(王女を押し止めとどながら) 王の云う事はも

つともです。王の敵はわたしですから、尋常に勝負をしなけれ
ばなりません。(王に) さあ、すぐに勝負をしよう。(剣を抜

く)

王 年の若いのに感心な男だ。好いいか？ わたしの剣にさわれば

命はないぞ。

王と王子と剣を打ち合わせる。するとたちまち王の剣は、杖つえか何

か切るように、王子の剣を切ってしまう。

王 どうだ？

王子 剣は切られたのに違いない。が、わたしはこの通り、あなたの前でも笑っている。

王 ではまだ勝負を続ける気か？

王子 あたり前だ。さあ、来い。

王 もう勝負などはしなくても好い。(急に剣を投げ捨てる) 勝ったのはあなただ。わたしの剣などは何にもならない。

王子 (不思議そうに王を見る) なぜ？

王 なぜ？ わたしはあなたを殺した所が、王女にはいよいよ憎にくまれるだけだ。あなたにはそれがわからないのか？

王子 いや、わたしにはわかっている。ただあなたにはそんな事

も、わかつていなそうな気がしたから。

王（考えに沈みながら）わたしには三つの宝があれば、王女も貰えると思っていた。が、それは間違いだったらしい。

王子（王の肩に手をかけながら）わたしも三つの宝があれば、王女を助けられると思っていた。が、それも間違いだったらしい。

王 そうだ。我々は二人とも間違っていたのだ。（王子の手を取る）さあ、綺麗きれいに仲直りをしましょう。わたしの失礼しつれいは赦ゆるして下さい。

王子 わたしの失礼も赦して下さい。今になって見ればわたしが勝ったか、あなたが勝ったかわからないようです。

王 いや、あなたはわたしに勝った。わたしはわたし自身に勝つ

たのです。（王女に）わたしはアフリカへ帰ります。どうか御安心なすつて下さい。王子の剣は鉄を切る代りに、鉄よりもつと堅い、わたしの心を刺したのです。わたしはあなた方の御ご婚こん礼れいのために、この剣と長靴と、それからあのマントルと、

三つの宝をさし上げましょう。もうこの三つの宝があれば、あなた方二人を苦しめる敵は、世界にないと思いますが、もしまた何か悪いやつがあったら、わたしの国へ知らせして下さい。わたしはいつでもアフリカから、百万の黒ん坊きんぼうの騎兵きへいと一しよに、あなた方の敵を征せい伐ぼつに行きます。（悲しそうに）わたしはあなたを迎えるために、アフリカの都のまん中に、大理石の御殿

を建てて置きました。その御殿のまわりには、一面の蓮はすの花が咲いているのです。（王子に）どうかあなたはこの長靴をはいたら、時々遊びに来て下さい。

王子 きつと御馳走ごちそうになりに行きます。

王女 （黒ん坊の王の胸に、薔薇ばらの花をさしてやりながら）わたしはあなたにすまない事をしました。あなたがこんな優しい方やさだとは、夢にも知らずにいたのです。どうかかんにんして下さい。ほんとうにわたしはすまない事をしました。（王の胸にすがりながら、子供のよう泣き始める）

王 （王女の髪かみを撫なでながら）有難ありがとう。よくそう云つてくれました。わたしも悪魔あくまではありません。悪魔も同様な黒ん坊の王

は御伽噺おとぎばなしにあるだけです。（王子に）そうじゃありませんか？

王子　そうです。（見物に向いながら）皆さん！　我々三人は目がさめました。悪魔のような黒ん坊の王や、三つの宝を持つている王子は、御伽噺にあるだけなのです。我々はもう目がさめた以上、御伽噺の中の国には、住んでいる訣わけには行きません。我々の前には霧きりの奥から、もっと広い世界が浮んで来ます。我々はこの薔薇と噴水との世界から、一しよにその世界へ出て行きましょう。もっと広い世界！　もっと醜みにくい、もっと美しい、——もっと大きい御伽噺の世界！　その世界に我々を待つているものは、苦しみかまたは楽しみか、我々は何も知りません。

ただ我々はその世界へ、勇ましい一隊の兵卒のように、進んで行く事を知っているだけです。

(大正十一年十二月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～11月刊行

入力：j.utiyama

校正：多羅尾伴内

2004年1月5日作成

2010年11月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三つの宝

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>